

新しい 授業づくりの 文化をつくる

令和5年12月22日
「能力ベースの授業づくり実践講座」通信
第17号 齊藤先生実演授業③

■講座の目的

- ①未知の問題場面に出会っても、解決に向けて行動できる汎用的な力(資質・能力)を子供たちに育むため、学習指導要領に基づいた授業づくりについて実践を通して主体的に学ぶ。
- ②教師同士のネットワークを構築し、講座での学びを吹田市内で広げるとともに、自校でのOJTに生かすことにより、学習指導要領に基づいた授業づくりの文化を築く。

■講座の目標

令和6年度スタートにあたり、吹田市100%の教職員が学習指導要領に基づいた授業づくりを目指す。
「学習指導要領に基づいた授業とは…である」を自分の言葉で語る。

齊藤一弥先生の実演授業から学ぶ③



齊藤先生の実演授業から学ぶ研修会第3弾。
今回は、小学校5年生社会科「社会的事象の意味を多角的に考える～米のブランド化～」の実演授業でした。ブランド化や第6次産業は、現行学習指導要領の流通の1つの視点として位置付けています。
授業では、齊藤先生自ら生産者、流通業者の方にインタビューされ、編集した映像を追及のきっかけに授業が展開されました。子供たちにとって身近に感じにくい流通へいかに関心を持たせられるかー子供たちの姿を通しての多く学びがありました。

価値ある事象への関心

○問題場面を確認する

米がブランド米として販売されていることを確認する
「東の横綱：魚沼産コシヒカリ」
「西の横綱：島根・仁多米」
藤本米穀店 五代目店主 藤本真由さんのインタビューから「仁多米の独自ブランド『大峠源流米』を売り出した理由」について考える

事象(ブランド化)を多面的に考察する

○流通業者の立場から考える

「米屋に生まれたからには…(藤本さん)」
生産者へ … 生産者が米作りに熱心になる
「フィードバックによって生産者が米作りに熱心に取組み、品質が良くなる」
流通業者として … つながることが米屋の使命
「生産者と消費者人をブランド化でつなぐ」

○生産者の立場から考える

「味相当の単価で引取ってもえる…(恩田さん)」
生産者として … 米を丁寧に作る「特別な工夫はないのだけれども」
流通業者へ … 「純粋なおいしい米をアピールしてもらって助かっている」
「藤本さんの流通に感謝している」

『大峠源流米』を売り出すことは、どのようなメリットがあるのだろうか

事象の価値の考察

○ブランド化の価値を考える

食料生産を支える人々の「ブランド化」という工夫や努力が引き出す価値への気付き
「ブランド化によって米の生産性や品質を高めることにつながる」
例) ブランド化によって生産者が自己の生産物が評価されることで誇りをもつ



齊藤先生実演授業後のお話は裏面へ

Why

なぜ学ぶのか

子供達が身につけるべき資質・能力は？

What

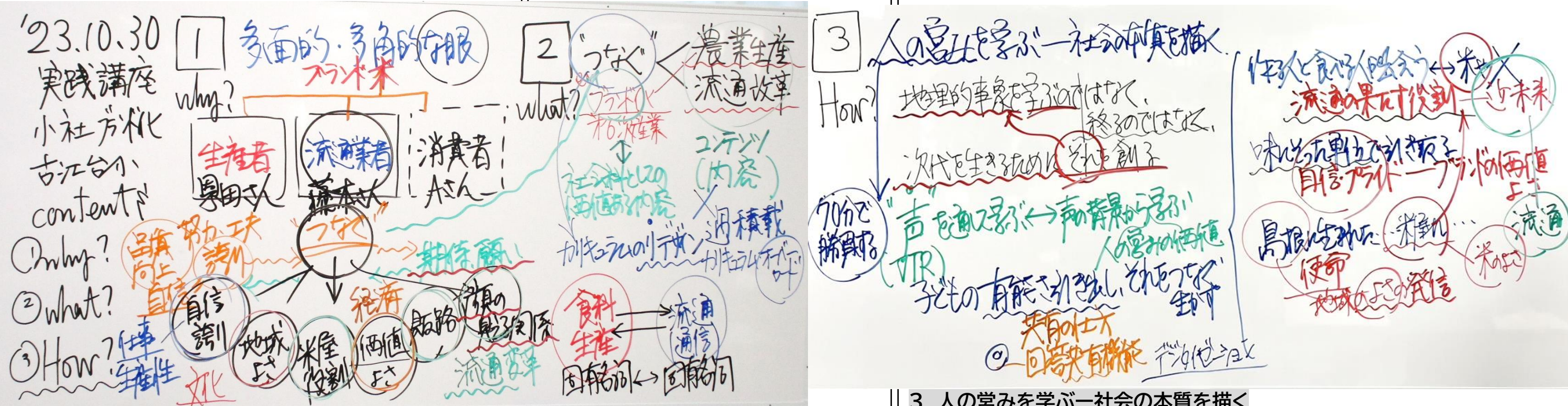
何を学ぶのか

子供達の学習対象は？

How

どのように学ぶのか

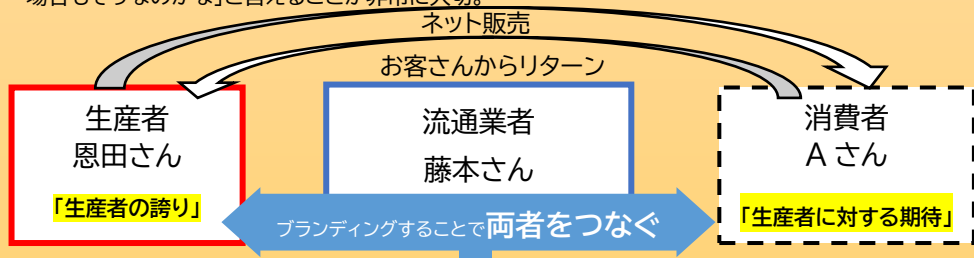
子供達の学習過程は？



1 多面的・多角的な眼を鍛える

多角的

ブランド米についての違った立場から眺めることが大事。今日の場合は、生産者、流通業者、消費者の3つの立場に立って議論することが、多角的に物事を考えるということ。
「藤本さん」という固有名詞が大事。けれど、最後はこの名詞が消えても同じだってことが言えるようにしたい。「きっと他の米屋さんもそういう風にやっているのかな」、「他の産業の場合も、あの商品の場合もそうなのかな」と言えることが非常に大切。



多面的

- | | | | |
|-----------------|-------------------|-------------------|------------------|
| 文化的側面
●地域の良さ | 流通改革
●米屋の役割●販路 | 経済的側面
●米の価値●良さ | 仕事・生産性
●自信●誇り |
|-----------------|-------------------|-------------------|------------------|

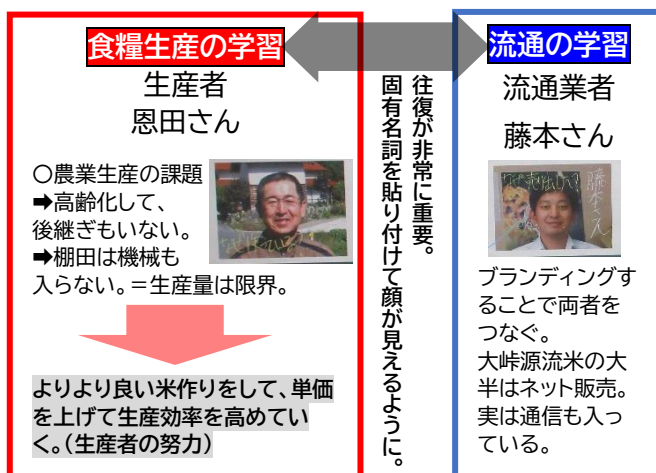
流通業者は、具体的にどんな立ち位置で、つなぐという仕事をしているのか。いくつかのカテゴリーで整理していきたい。これが多面的に考えるということ。
今日の授業の1番のキーワードは、「島根に生まれたからには」、「米屋に生まれたからには」
島根に生まれたからには→生産量1パーセントの島根県の米を広く日本のお米に関心のある消費者とつないであげたい。
米屋に生まれたからには→「作る人と食べる人がね、出会えるのであれば米屋なんかいらないんだ」
重要なのは、誇り(プライド)。努力、工夫は社会科のこの産業単元のもう鉄板中のキーワードだけれど、もう1歩進めたい。プライドがなくなると、産業は先細りしてしまう。自分たちの米に対する自信=誇り(プライド)を伝えていきたい。
インタビューの裏側に、追及の視点がたくさん出てくる。それを教師がうまくコントロールしながら、板書などで構造化する仕事が本来は期待されている。

●なぜ島根の教材か

3、4年は基本的に地域教材、5年以降になると地域を離れる。4年「暖かい地方の暮らし、寒い地方の暮らし」では、「場所は違っても、事象を見つめていくときの分析の視点は基本的には同じだな」という経験しておきたい。すると、5年生で産業の単元の時に、自分たちのところから離れたところの事象であったとしても、産業の構造を眺めていく視点が持てる。

2 農業生産と流通改革を“つなぐ”

学習対象として扱いたかったことは、つなぐという視点で、「農業生産」と「流通改革」を学習していくこと。ブランド化や第6次産業は、農業生産の学習にコンテンツとしてある。コンテンツで見ると、「ブランド米とはどういうことか」という話になってしまう。
しかし、小さな米屋さんブランド化をするこの事例を見るだけでも、社会科としての学習価値が山ほど貼り付いている。
今回は「つなぐ」という1つのキーワードで眺めてみる。
すると、社会科として、教科の価値ある内容というものがたくさん出てくる。その中で「ブランド米が持っているものを、流通改革とセットで考えたらどんな学びがそこに生まれてくるか」・・・「つなぐ」という言葉で2つの小単元を1つにして、考えを整理しながら取り組む。



このように、少し考えを変えて社会科の授業をしていかないと、カリキュラムオーバーロードになってしまう。(カリキュラムオーバーロード: 過積載) 社会科は、新しいものができればどんどん増えていく。学習指導要領は、どんどん内容が増えていって削られないため、積み切れてなくなってしまう危険性がある。そのため過積載からの解放を目指す。今日はその代表的な例として実演授業を行った。

3 人の営みを学ぶ—社会の本質を描く

人の営みを学ぶという文脈を描くことが大事。
地理的事象を学ぶので終わるのではなく、それを創る事実を学ぶので終わるのでもなく、それを創ることが社会科の1つの究極の目標である。つまり学んだことを生かして次の時代を創る、自分が生きていく時にそれを創るということ。
今日の場合、この後スーパーに行った時、「誰々が作りました」と生産者の写真付きの野菜があったとする。さらに「QRコードを読んで感想を送ってください」という表示があったとき、子供たちは関心を持って、場合によっては感想を送るなどをやり始めるかもしれない。それが、成人して自分で生活を始めた時、望ましい生産者、流通業者、消費者の関係性に関心を持てれば、究極はこの産業を支えることになる。
今日の授業で提案させていただいたのは、この人の営みとして、やっぱり提供したものが声。つまり、声を通して学ぶ。
なおかつ、ストレートにその事実を言わない、その声の裏側の価値を学ぶ。声の背景から人の営みの価値を学ぶことをやりたかった。

「作る人と食べる人が出会うことができたなら米屋はいらない。」
出会うって環境が今はない。だから、米屋が大事だ。→近未来を含めた流通の果たす役割が見えるようにしたい。
藤本さんは、将来の米屋像を考えている。だから、米屋を建て替えた。今までは、店頭で米いっぱい飾ってあったがもう米飾っていない。商品はタブレット上で見られるようにしてあって、全部受注制。そういう考え方に変わっている。

「味に沿った単価」
一プライド、自信。
ブランド化にしてもらったことの価値、良さ。これを見せたい。恩田さんは「藤本さんのところのブランド米を見ると、有機栽培だとかいろんなことしているけど、自分たちは何にもしていない。でも、この土地が、500～600mあって、自然環境の良さを生かさない手はない。だから、この環境の中で育つ米として、米の生育に自分たちが生活を変えた。」
そこに自信とかプライドがあると言える。

「米屋に生まれたからには」「島根に生まれたからには」
一良さの発信
●米屋に生まれたからには
つなぐ役をしてみたい。米の良さ
●島根に生まれたからには
島根の良さ、地域性。
こういったようなものを発信していくことが、近未来の流通という産業に課せられている使命と言いたい。

背景にあることは何かと考えていくと、次代を生きる子供たちが大切にしてほしい価値がいっぱい出てくる。
最後に・・・
子供の有能さを引き出し、今日の場合はそれをつなぐ、生かす。こういうことを大事にしていっていただきたい。
Yさんが早い段階であいいうことを言うてくるとは正直想像しなかった。けれども、生産者が消費者に繋いで、消費者がまたそれに、声は元に戻していくことを、はじめてから言ってきた。子供は教えてもいないにもかかわらず、そういったようなことが言える有能な学び手。有能さがいっぱいあったんだけど、なかなかそれができなかった。本当はほとんどん言ってもらいたいけど、答えがないものに対しては言いにくい。今日みたいにギャラリー多い時は、回答共有システムがいいかもしれないとも感じた。

受講者より

生産者-流通業者-消費者という子供たちにとって身近に感じにくいテーマを、人に着目することによって分かりやすく身近に感じるようになってきたと思います。子供たちの気づきもするどく、有能さを感じました。(S先生)

【編集後記】齊藤先生自らのインタビューを材とした授業。齊藤先生から「授業を創るとはどういうことか？」を問われている気がした。教師が教材を追及し、学び続ける。その熱量こそ授業づくりの根幹にあると感じた講座であった。(文責:教育センター山笠)